

## 「特別」に隠れた偏見

福島大学附属中学校 2年 牛坂 心優

私は今まで妹のことを「少し特別」な存在だと思っていた。なぜなら妹には少し障害があり、学校では周りの子たちと同じように決められたことを守って生活したり、学校に馴染むことが難しいときがあったりしたからだ。そのため、小さいときから私は、妹のことを「守ってあげないといけない」「助けてあげないといけない存在なんだ」と思うようになっていった。

妹は、私にとってとても大切な存在で、嫌いになったことなど一度もなかった。でも、心の奥深くで、「妹はどこか他の子とは違うんだ」という思いを抱えていた。その違いをどうにか明るく捉えようと私は、妹のことを「特別」と言い換えていて、自分の中で勝手に納得していたのかもしれない。

そんな中、当時の小学校での道徳の授業で先生が私の考えを大きく変化させる一つの話をしてくれた。

「みなさんは『特別な人』と聞いたとき、どのような人のことを思い浮かべますか？障害を抱えている人のこと？外国から来た人のこと？スポーツ選手のこと？でも私は、『特別』という言葉の裏には、『自分たちとは違う』といった線引きが気づかないうちに含まれてしまっていると思うんです。」

私は、先生がこの話をしてくれたとき、自分の心を全て読まれたような不思議な気持ちになった。今までは妹の違いを少しでも明るく捉えるために使っていた「特別」という言葉が、妹を「自分とは違う存在」とはっきり決めつけていて差別していたのかもしれないと思った。私はそのときに初めて自分の心の中に偏見があることに気がついた。

私がそんなことを考えているとき、先生が続けて話し始めていた。

「たとえ障害を抱えていたとしても、見た目に違いがあったとしても、人はみんな違いがあるし、みんなが同じ『人間』なんです。『守ってあげよう』という気持ちの裏に『相手の方が弱い』という決めつけがあれば、その気持ちは差別につながってしまいます。」

私はハッとしました。いつも妹を守ろうと、どんなときも先回りして、手伝っていたからだった。これまで私がしていた手助けは、妹にとって本当に必要なものだったのだろうか。とそんな疑問が頭をめぐり、いてもたってもいられなくなった。

家に帰ってからはすぐに妹を探した。妹は部屋でキーホルダーを作りながら好きな歌を口ずさんでいた。その時の妹は、とても満足そうに見えた。こんなに満足そうにして

いる妹の顔を見るのは久しぶりで、とても嬉しかった。私は妹のそんな姿をみて、改めて先生の話思い出した。妹には妹なりの生き方があり、考え方がある。時には手助けが必要なときもあるかもしれない。でも私は、妹自身の「できる力」に目を向けずに、「できない力」だけを見ていて、妹の可能性を狭めてしまっていたと感じた。私は、一番したくなかったことを無意識のうちにしてしまっていたのだ。

次の日からは、妹の「できる力」をしっかりと見守るようにした。私は妹に「これもやってみる？」と話しかける機会を増やしていった。そのうち妹は、自分から積極的に挑戦するようになっていった。その姿をみて私は今までの必要以上の手助けへの反省やこれからの関わり方について考えようと感じた。私と妹には感覚にも考え方にも違いがあって当然だということ認識しながら「できる力」を伸ばすための見守りを続けていこうと思った。

妹の「できる力」を伸ばすために見守ることを意識してからは、妹の行動が確実に変化していった。少しずつでも学校に行けるようになったり、周りの人の気持ちを考えて生活したりできるようになった。

あの日、先生が私に刻み込んでくれた「特別に隠れた偏見」。私はそのことを一生忘れることはない。そして、妹は私と同じ一人の人間だからこそ「特別」な存在だとは思わない。互いに尊重し合い、信じ合い、支え合って未来に一步ずつ足を進めていきたい。それは家族であっても、友達であっても平等であり、私の中で決して変わることはない考え方だ。

これからも、私は妹の「できる力」を信じて少し離れたところから見守り、必要なときには近くからそっと手を差し伸べられる存在でありたいと思う。本当の思いやりや優しさとは、「やってあげること」ではなく、「相手を心から信じて尊重すること」だと思う。だから、私は先生のようにこれからの未来に偏見や差別がなくなるための行動を起こしていく。一人でも多くの人が自分の心の中にある「特別」に隠された「偏見」に気づき、見直せるように。そして、一人でも多くの人が自分の生きたい生き方で毎日を送ることができるように。